

互恵的国際協力モデルに

オイスカ人材あり!

「OB・OG×日本企業の新しい連携のカタチ」

オイスカでは、訪日研修を終えた人材をOB・OGと呼んでいます。

現在母国で活躍するOB・OGは約5千人。

今回はオイスカの活動現場のみならず、日本企業などとも連携しながら日本で培った力を発揮するオイスカ人材たちの事例をご紹介します。



海外研修生 受け入れの歴史

オイスカの人材育成は農業分野が対象と思われがちですが、海外研修生の受け入れの歴史は、工業分野の研修からスタートしました。1963年、フィリピンのマプア工科大学からやってきた6名がオイスカの研修生第一号です。

戦後に飛躍的發展を遂げた日本の原動力を学びたいというのが、送り出し側の最大の目的だったため、受け入れ当初は機械工業や陶磁器、工作機械や自動車整備といった技術の習得ができる企業に委託をして、研修を実施していました。

一方でアジア各国における食糧増産は差し迫った課題となっており、オイスカはインドやパキスタン、フィリピンなどに相次いで調査団を派遣。66年には初となる開発団をインドに派遣したのを皮切りに、フィリピンでも地元政府の要請に基づき、農業指導ができるモデル農場を設置し、農業技術の普及に努めました。

国内においても67年に中部日本研修センターが完成すると、翌68年には西日本、四国、富山と、研修生の受け入れ拠点が次々に完成。海外からの農業研修生受け入れの本格化に向けた準備が整いました。移転や建て替えなどを経て、現在は中部日本、関西、四国、西日本の4つの研修センターで各国からの人材の受け入れを行っています。

訪日研修生の活躍

日本での研修を修了した訪日研修生をオイスカではOB・OGと呼び、現在その数は46カ国・地域の5千人以上。海外の活動拠点である研修センターの運営や、9年にスタートした「子供の森」計画の実施には、こうしたOB・OGたちの存在が欠かせません。

90年代半ば頃までは、日本から各国に開発団員を派遣し、センターの運営や農業指導に当たっていましたが、現在では多くの海外研修センターがOB・OGたちによって運営されるようになりました。オイスカの人材育成の成果と言えるでしょう。

また、近年ではそうした現場で活躍する人材が「企業内転勤」の在留資格で日本に招聘され、本部や国内研修センターなどの職員として各種業務に従事する事例も増えてきてい



日本の古巣で活躍中!

ロナルド・マクドナルド (ロン)
(2008年 西日本研修センター・
2019年 中部日本研修センター 卒業)
中部日本研修センター 研修課

中部日本研修センターで農業指導の研修中、勤勉な様子とオイスカ理解の深さが、筑田明生副所長の目に留まり、2022年にスタッフとして採用された。

現在、企業内転勤の在留資格で日本に滞在し、フィリピンやマレーシアからの先輩指導員と共に中部日本研修センターで活躍するロンさん (表紙写真中央)。

フィジーでもオイスカの研修センターで研修生に農業を指導していた経験があるものの、日本で指導員として働くには、難しさもあると言います。母国で教えてきたのは、文化的な背景も、話す言語も同じフィジーの青年ですが、ここにはさまざまな国の研修生がいます。来日前の農業経験も日本語学習歴も違うため、やさしい日本語を使いながら、自分がやって見せ、できるだけ穏やかな態度で研修生と接し、誤解などが生じないように配慮しているそう。そんなロンさんを、センタースタッフは「自然と農業が大好きで、自分にできることを精一杯やり切る姿勢が周囲に安定感をもたらしている」と評価。

「日本で成長の機会をいただき本当にありがたい。しっかりセンターに貢献できるよう頑張りたい」と話すロンさん。成長、期待しています!



ふるさとの発展に尽力!

デルフィン・テソロ
(1987年 西日本研修センター 卒業)
アブラ農林業研修センター 所長

日本での研修を終え、帰国後指導員として働いていたアブラ農林業研修センターで、1991年から所長を務める。

センターでの農業研修や日本に送り出す技能実習生の指導のほかにも、「子供の森」計画をはじめとする緑化活動など、いくつもの業務を抱え多忙な日々を送るデルフィン所長は、地域の人たちに寄り添うだけではなく、行政とのさまざまな折衝もこなす真のリーダーです。

アブラ州はフィリピン北部に位置し、貧困率が高いだけではなく、常にさまざまな自然災害の脅威と向き合う地です。「ここに住む人たちが、少しでもいい生活ができるように」と、ふるさとを思う気持ちが、多くの苦労に直面しながらも40年近く活動を続けてきた原動力となったと話します。

日本にも“デルフィンファン”をたくさん持つ人気者は、今月来日し、大阪でのトークイベントでその思いを語ります。オンラインでの参加も可能です。ぜひデルフィン所長の思いに触れてください。

〈トークイベント概要〉

- 日時: 11月23日 (木・祝) 15:00 ~ 16:30
- 場所: 国民会館「武藤記念ホール」
国民会館大阪城ビル12階

詳細はこちら



互恵的国際協力の プレーヤーに

オイスカは2021年の創立60周年を機に、10カ年計画を策定し、そ

ます。現在、フィジー、マレーシア、ミャンマー、フィリピンから12名が農業指導や食堂運営、研修生指導の分野で活躍しています。
もともとは、日本で学んだ研修生が、帰国後に母国の発展に寄与することを目指して始まったオイスカの人材育成事業ですが、今では日本におけるオイスカの業務をも担う人材となっているのです。

の柱として2つのアプローチを打ち出しました。一つはEBS (Eco-based Solution / 自然を守り育み、その力を活用した取り組み) で、もう一つはBBS (Business Based Solution / ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシヤルビジネスの推進) です。前者の分かりやすい一例として、オイスカがこれまででも各国で積極的に取り組んできた植林プロジェクトが挙げられます。特に、モデルとなるような緑化プロジェクトの実施やそれを担う人材の育成に注力する計画です。ただ、BBSについてはビジネスという言葉

葉がNGOとしての取り組みになじまないといった意見のほか、具体的な事例が少ないため、イメージがわからないといった声も聞かれます。
BBSは、「国際協力II 貧しい国を支援する」といった古い考え方から脱却し、「国際協力II お互いに発展するための協働」という考えに立ち、互恵的な取り組みを進めるものです。例えば、オイスカの訪日研修生OB・OGが、日本の企業と対等なパートナーとしてビジネスを進めるためのサポートなどが挙げられます。
今後、OB・OGとオイスカ会員企業とのビジネスマッチングなどを

積極的に進めたいと考えていますが、そのためには彼らの現状をしっかりと把握し、連携していくことが求められます。オイスカでは、20年より連携支援サミットと銘打って、支部などの国内のオイスカネットワークと、人材育成との連携を推進するための話し合いの場を設けてきましたが、今年も前回に続いてOB・OGとの連携についてサミットで議論する予定です。
次ページでは、帰国後の技能実習生との業務連携を推進している受け入れ企業と、農業研修生OBと自治体との連携事例をご紹介します。

技能実習生と企業の連携

オイスカが目指す互恵的人材育成のモデルケースともいえる取り組みについて、技能実習生の受け入れ先の企業2社からお話をうかがいました。

愛知ダイハツ(株)

● 取締役相談役 岸 計重氏

—— 現地子会社で採用した技能実習生OBを企業内転勤の形で日本に再招聘したとうかがいました

はい。現地に立ち上げているNagoya Automobile Malaysia (NAM) で採用した1期生の実習生OBですが、幹部人材として育てるためのマネジメント力もつけさせたいと考え、再び愛知ダイハツで学んでもらいました。弊社では、整備士もフロント(直接お客様の対応をする窓口)業務をしているので、実習生にも、そうした業務はもちろん、経営に関わる部分も実習期間中に学んでもらおうと取り組んでいます。NAMに続く2店舗目、3店舗目も考えていますが、その経営を担う人材になってもらいたいですね。

—— 実習生は確かな技術を身につけて国に帰っていますね



現在実習中の4名。自動車整備以外にもさまざまな業務を体験中

今期で6期目の受け入れとなりませんが、送り出し機関のMARRA公団が入国前にしっかり日本語と自動車整備の基礎的な技術を指導しているのも大きいと感じています。3年の実習期間中、実習生も一般の社員と一緒にすべての研修を受けさせて、ダイハツ独自の技術検定の資格を取得して帰っていきます。

また、彼らが日本に来る前に研修をしている自動車整備学校に、実習用の車両や機械などを寄贈して、役立ててもらっています。できるだけ日本で学ぶ環境と近い環境を整え、技術を高めた状態で来日してもらいたいとの考えからです。実習期間中、彼らは確かな戦力となっていますし、

将来、国に帰ってからでも現地での業務を支える人材として活躍する存在ですから、しっかり育てていきたいと考えています。

—— 実習生の受け入れ、またOBの採用に当たり課題はありますか

せっかくですから、自分たちが育てた人材には長く勤めてもらいたいと考えていますが、マレーシアでは、ほかのアジアの国と同様にジョブホッピング(より好待遇やスキルアップが望める職場を求め、短い期間に転職を繰り返すこと)が一般的で、現在は優秀な整備士が韓国に流れてしまう傾向があります。そうしたことを考えると賃金の面の改善もしな

ければなりません。

また実習生は3年間、家族と離れて日本で学んでいますから、ある程度の期間頑張ったら、家族を一時的に日本に呼べるようなサポート制度があってもいいのではないかと感じます。どのような環境で実習し、生活をしているのかを見てもらうことで家族が安心すれば、本人も気持ちの面で安定するのではないのでしょうか。そうした細やかなサポートによって、帰国してからNAMで採用する実習生OBの定着率も上がるのではないかと考えています。

(有)清明エンジニアリング

● 代表取締役 鈴木 宏昭氏

—— 長年の受け入れありがとうございます。実習生受け入れのきっかけを教えてください

父の会社で実習生を受け入れていて、空調機械を扱う私の会社でも実習生を預からないかとオイスカから紹介を受け、15年ほど前からマレーシアの青年を受け入れています。自分自身はマレーシアという国のことをよく知らなかったのですが、まずは現地に行き、送り出し機関であるMARRA公団を訪問し、来日前の実習生に日本語などの指導をしているスタッフとも面会した上で受け入れをスタートしました。

——現地法人を立ち上げていらっしやるそうですね

10年ほど前に清明エンジニアリングマレーシアを設立しました。実習生が身につけた技術は、マレーシアにはないものも多くあります。日本で彼らは日本人社員とペアを組んで、3年間しっかり技術を習得しています。そうした実習生たちの努力を知っていますから、彼らが国に帰ってからの受け皿となる場所を作りたいと考えて立ち上げました。7年前に帰国したOBたちがこの会社を軌道に乗せて現在に至っています。来日前の実習生は、この会社で1〜3ヵ月程度の技術研修を受けさせています。もちろん指導しているのは実習生OBたちです。

現地で活躍する者の中には国内で一番と言われるほどのスペシャリストになったOBもいます。現在はタイやインドネシア、インドなどにも事業が広がり、彼らはグローバル人



清明エンジニアリングで学ぶ実習生

材として成長しています。本当にうれしいことです。

——今後の夢をお聞かせください

アジア各国がバイタリティーある成長を続けて豊かになっていく中、少しでもよい発展につながるよう、自分が育てた実習生たちを通じて貢献していきたいですね。実習生たちが帰国してマレーシアをベースにしながらアジア各国に技術を広げていくことを願っています。

研修生OBと自治体の連携

オイスカの現場の枠を超え、自治体で活躍する研修生OBがいます。西日本研修センターで農業指導員として勤務していたフィリピン出身のサラゼル・マキントウラ・ベンダニオ（ドドイ）さん。

自治体がオイスカの人材を求める理由はどこにあったのか。ドドイさんの「ご近所さん」としてサポートを続けているオイスカ会員の坂本進さんにお話をうかがいました。

福岡県東峰村

●オイスカ会員 坂本 進氏

——ドドイさんを東峰村で採用することになった経緯を教えてください
東峰村は人口2000人ほどの小

さな村で、どここの山村も同じ状況だと思いますが、少子高齢化に直面しています。地域おこし協力隊（以下、協力隊）で若い人を受け入れて、村の農業生産組合が運営するライスセンターの事業支援に当たってもらっていました。が、なかなか定着しない状況が続いていました。村としては、何とか若い人を増やしたいという思いがあつて、長く交流があるオイスカ西日本研修センターに相談して、当時センターに勤務していたドドイさんに協力隊員として赴任してもらうことになりました。

ドドイさんの熱心な仕事ぶりに、村としては、協力隊の期間が終わってもからもこのまま村に滞在してほしいという願いがありました。オイスカのセンターも間に入って調整を重ね、ドドイさんの採用に至りました。村では村営住宅を用意し、今春からは奥さんもフィリピンから呼んで夫婦一緒に村に滞在しています。

——最近のドドイさんの様子はいかがですか

今はちょうど稲刈りシーズンで一年のうちで一番忙しい時期ですよ。ドドイさんはコンバインのオペレーターとして本当によく頑張っています。ライスセンターの所長からも頼りにされていて、今では中心的な存在です。稲刈りが終わって、お米の



稲刈りに忙しいドドイさん（10月10日）

業務に一区切りついたら、野菜栽培をして道の駅などで販売もするそうです。ライスセンターの収益性の向上につながるよう、一所懸命取り組んでくれていて、村にとってはなくてはならない存在ですよ。

しかも、ライスセンターの仕事だけではなく、地域の一員として清掃活動や隣組の行事にも参加して村の生活にも溶け込んでいます。

——坂本さんのようにサポートして下さる方の存在も大きいですね

昔からお付き合いがありますからね。この前の中秋の名月の日には、私の自宅に奥さんも招いて一緒にお月見を楽しみました。ご近所さんとしてのお付き合いですね。これから夫婦で長く東峰村に住み続けてくれることを願っています。